

Title	＜翻訳＞ノルド諸語文法にみられる古代より継承されたいくつかの特徴(翻訳)
Author(s)	Wessen, Elias; 菅原, 邦城
Citation	大阪外国語大学学報. 23 p.189-p.204
Issue Date	1971-01-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80389
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ノルド諸語文法にみられる古代より
継承されたいくつかの特徴 (翻訳)

菅 原 邦 城

Några fornärvda drag i de nordiska språkens
grammatik. (Translation).

Kunishiro Sugawara

This is a translation from a part of the synoptical work written by one of the leading philologists in Scandinavia: *De nordiska språken* av Elias Wessén, åttonde upplagan, Stockholm 1968, pp. 8-25. Last summer permission was readily granted by Professor Wessén to translate his renowned work into Japanese, for which the translator is very grateful. The book has already been published in Russian and German.

It is the sincere wish of the translator that this Japanese translation will be of interest to the students of comparative philology in this country.

Note. The author's footnotes are given at the end of this translation and the translator's notes added in square parentheses.

October, 1970

K. S.

ノルド諸語〔北欧5国で話されている印欧語〕は、ゲルマン語派に属して、これの独立したかつ独自に発達した一枝をなす。西暦初頭にゲルマン人は、スカンディナヴィアと、西と南ではライン河に到り、東ではヴァイクセル河に到る北ドイツに居住していた。かれらの言語すなわちゲルマン基語<urgermanska>は、次第に方言に分裂していった。これらは、この最古の時代において相互関係にみられるその位置にしたがって名づけられる三つの主要グループ、すなわち北ゲルマン語、東ゲルマン語および西ゲルマン語群に分れた。

キリスト生誕の頃、東ゲルマン人は東のヴァイクセル溪谷を含むオーデル河から膨脹した。かれらは古く北欧より発したものと思われる(ゴート人<goter>——ゴットランド人<gutar>——イェータランド人<götar>、ブルグンド人<burgunder>——ブルグンド島<Burgundarholm>すなわちボーンホルム<Bornholm>、ヴァンダル人<vandaler>——ヴェンデル<Vendel>すなわちユラン半島の北端地方)。東ゲルマン諸語は、すべて死滅している。最も重要なのは、ゴート語<gotiska>、すなわち最古のゲルマン文学語である。ウルフィラ (Wulfila, 後 311—383

年)は、4世紀中頃ドナウ河南岸にあるローマ属州 Moesia (今日のブルガリア) に定住していたキリスト教徒西ゴート人の司教であった。ウルフィラの聖書翻訳(4世紀中期)のうち一部分〔四福音書〕のみが、就中、500年頃イタリアにおいて・恐らくテオドリック大王の都ラヴェンナで書かれたウプサラ大学蔵のいわゆる Codex Argenteus〔銀文字写本〕に伝存されている。

西ゲルマン諸部族は、オーデル河の西部、主にエルベ河とライン河の間に定住していた。その多くは民族大移動の嵐の中に滅び、その他は新たな部族構成に加わった。民族大移動時代の後期には、スラヴ人(ヴェンド人、その他)が北ドイツの平原で北欧人と残りのゲルマン人の間に浸透してきた。これによって、ノルド諸語は幾世紀も前に大陸ゲルマン諸語からはるか西において分離したのである。中世初頭には、以下の西ゲルマン諸語があった。すなわち、古英語 <forn-engelska>と古フリジア語<fornfrisiska>, 古低地フランコニア語<fornlågfrankiska> (ライン下流地方)と古サクソン語<fornsaxiska> (ラインとエルベの間), 古高地ドイツ語 <fornhögtyska> である。古英語と古高地ドイツ語は8世紀より, 古サクソン語は9世紀より, 言語的記念物をもっている。¹

タキトスの時代(後100年頃)に、エルベ下流地方にはランゴバルド人<langobarderna>が住んでいた。しかし、かれらはまもなくそこより移動して、まずハンガリーに達し、その後(6世紀) イタリアに・かれらに因んで名づけられたロンバルディア<Lombardiet>〔イタリア語 Lombardia〕に移った。タキトスの言によると、ランゴバルド人の北方には大きな森林と河川があった。それはトラヴェ<Trave>からスリーン<Slien>〔ドイツ語 Schlei〕に達するノルド語で Iarnwith「鉄の森」、サクソン語で Isarnho と呼ばれた密林〔今日の Dänischwohld〕のことである。この西においては、アイダー川<Eider>のまわりに広い湿地帯が広がっていた。かようにしてここには住民の少ない未開地があって、これはユランとサクスランド<Saxland>〔デンマークに境を接する北ドイツ〕との自然の境界をなしていた。この住民は、アイスランド語では Holtsetar「森の住民」、古サクソン語では Holtsāti と呼ばれ、これから Holsten (高地ドイツ語にふさわしくされた Holstein と共に) が出ている。ドイツ領シュレスヴィヒのアンゲルン半島にはアングル人<anglerna> が住んでいたが、かれらは5世紀にサクソン人<saxarna> やジュート人<jutarna> と共にイングランドに移住した。教会史家ベダ(Beda, 735年没)の伝えるところによると、アングル人はジュート人とサクソン人の地方の間にまだ未開のままであった国をあとにしてきたのである。この森林地帯は、次第に南から開墾され、居住されるようになっていった。しかし、これらの新しい開拓者とその北のユランの隣人との間の言語上の相違は余りにも著しく、両者の均等化は起らなかった。この原始林の北端にドイツ人に対する防壁として防禦提すなわち Danevirke を築くことが、すでに9世紀には必要であったのである。

しかしながら、南ユランの諸部族の移住がノルド語と西ゲルマン語間のはっきりした言語境界発生に関する説明のすべてになりうるということは、ほとんどありえないのである。極めて重要なのは、南ユランと北欧の諸地方特に中北部スウェーデン <Uppsverige> との間に活発な交流

があったことである。ヴィーキング時代にビルカ〈Birka〉とヘーゼビュー〈Hedeby〉²との間に往來の盛んな通商路があった。スウェーデンのヴィーキング王国が、10世紀にユランの南部にあった（原書75ページ参照）。これらの地方の方言に認められる顕著な一致点は、スウェーデン東部海岸沿いのメーラル溪谷〈Mälardalen〉から南部デンマークの島々と南ユランに到るまで立証されることができた。³ 度重なるヴィーキング行と定住とが、まさにこの南部境界の露出した地域におけるノルド語的要素を強化した。これによって、その中心をはるか北方に有する言語特徴が南方に根を下ろし、ユラン半島の言語発展は純ノルド語の方向に明確にきめられてきているのである。

ノルド諸語は、ゴート人やその他の東ゲルマン部族がスカンディナヴィアに居住していた時期から（原書26, 27 ページを参照）、東ゲルマン諸語と共通点をいくつかもっている。すなわち、

1. *jj* と *ww* が、*ggj*（ゴート語 *ddj*）と *ggw* になっている。例：ゲルマン基語 **twai-iō*（**twai*、アイスランド語 *tveir* 「2」の属格）：古高地ドイツ語 *zweiio*、ゴート語 *twaddje*、アイスランド語 *tveggia*、古スウェーデン語 *twäggia*；（アイスランド語 *prír* 「3」）属格 *priggia*；ゲルマン基語 **ajia* 中性「卵」：ドイツ語 *Ei*、クリミア・ゴート語 *adda*、アイスランド語 *egg*、古スウェーデン語 *ägg*；古スウェーデン語 *däggia*、「授乳する」、ゴート語 *daddjan*（スウェーデン語 *dia* 「乳を与える」と関連）；ゲルマン基語 **hauwan*：ドイツ語 *hauen*、ゴート語 *haggwan*、アイスランド語 *höggva*、古スウェーデン語 *hugga*；ゲルマン基語 **treuwa*：ドイツ語 *treu*、ゴート語 *triggws*、アイスランド語 *tryggr*、古スウェーデン語 *trygger*；ドイツ語 *brauen*、アイスランド語 *bryggia* 同じ推移は、以下の例にもみられる。すなわち、アイスランド語 *dögg* 「露」、スウェーデン語 *dagg*（ドイツ語 *Tau* を参照）、アイスランド語 *skuggvi* 「影」、スウェーデン語 *skugga*（ドイツ語 *schauen* を参照）、スウェーデン語 *uggla* 「梟」（ドイツ語 *Eule*、英語 *owl* を参照）、スウェーデン語 *gnugga*（こする）（*gno* 「こする」より）、スウェーデン語 *glugg* 「穴、孔」（*glo* 「見つめる」より）、スウェーデン語 *lugg* 「むく毛」（*lo* 「大山猫」より）。

2. 動詞2人称単数過去形は、*-t* に終る。ゴート語 *gaft* 「汝は与えた」、*namt* 「汝は取った」、アイスランド語 *gaft*, *namt*。

3. ゴート語 *-nan*、アイスランド語 *-na* に終るいわゆる起動動詞〈*inkoativa verb*〉の形成。ゴート語 *fra-lusnan* 「失くなる、消える」（*fra-liusan* 「失う」）、*af-lifnan* 「残る」（過去 *bi-laif* 「残った」、ドイツ語 *bleiben*）、*fullnan* 「いっぱいになる」；アイスランド語 *losna* 「緩くなる」、*lifna* 「残る」、*roðna* 「赤くなる」、*visna* 「色あせる」、*harðna* 「固くなる」、*fastna* 「誓約・婚約する」その他；スウェーデン語 *kallna* 「寒くなる」、*ljusna* 「明るくなる」、*gulna* 「黄色くなる」等々。これは、西ゲルマン語にはみられない。

4. ゲルマン基語（ノルド基語）*-ōni-*、*-ini-*、*-ēni-* に終る弱変化動詞派生の抽象名詞。ゴート

語 lapons「招き」(lapon「招く」, ドイツ語 laden), skeireins「説明」(skeirjan「説明する」); アイスランド語 skipan「準備」(skipa「準備する」), skírn「洗礼」(skíra「清める, 洗礼を授ける」), lausn「解放」(leysa「解く」), sögn「話し」(segja「話す」); スウェーデン語 början「はじめ(börja はじめる)」, väntan「期待(vänta 待つ)」, その他。

ゴート語との類似は、東ノルド語〔スウェーデン語・デンマーク語を、西のノルウェー語・アイスランド語・フェーロー語(西ノルド語)に対比させた呼称〕にあって一番大きい。ゴート語は、古スウェーデン語と同じく開音節に *ō* を有する。ところがアイスランド語はこの場合、西ゲルマン諸語と同じく *ū* を有するのである。ゴート語 *bauan* (*bāan* と読む)「住む」, 古スウェーデン語 *bōa* —— アイスランド語 *búa*, 古高地ドイツ語 *būan*。ゴート語にはいわゆる *a* ウムラウトがなく、この現象は北欧では西部よりも東部にゆくにしがって少なくなる(原書 107 ページを参照)。過去分詞 ゴート語 *budans*「招かれた」, 古スウェーデン語 *bupin* —— アイスランド語 *boðinn*, ドイツ語 *geboten*。ゴート語は中性 *n* 語幹複数主・対格で *-ōna* (たとえば *augona*「眼」)の形をもち、これは古スウェーデン語 *-on* (*öghon*) に相当する。これに対して、アイスランド語は(多分類推によって新たに作られた) *n* のない形 (*augu*) をもつ。同様に、3人称複数接続法〔過去〕で、古スウェーデン語は *-in* (たとえば *varin*「もし彼らが〜であったとしたら」)をもつが、アイスランド語は *-i* (*væri*) をもつ。前者は、ゴート語 (*weseina*) と一致する。

一方、ノルド諸語は西ゲルマン語と共通するいくつかの特徴をも有している。そのようなものは、以下の通りである。

1. ゲルマン基語 *ē* > *ā*: ゴート語 *jēr*「年」—— アイスランド語 古スウェーデン語 *ār*, ドイツ語 *Jahr*; ゴート語 *lētan*「させる」—— アイスランド語 古スウェーデン語 *lāta*, ドイツ語 *lassen*。
2. ゲルマン基語 *z* (すなわち *s* の有声音) > *r*: ゴート語 *maiza*「もっと一層」—— アイスランド語 *meir*, 古スウェーデン語 *mēr*, ドイツ語 *mehr*, 英語 *more*。
3. 代名詞 *denne* (*detta*, *dessa*)「これ(これら)」の発生。ドイツ語 *dieser*, 英語 *this* を参照せよ。

語彙においても、この3語群の間には注目すべき差違がいくつか認められる。ノルド諸語の「太陽」を意味する語(アイスランド語, 古スウェーデン語 *sól* 女性)は、ラテン語(*sol* 男性)やギリシア語(*helios* 男性)と同じである。西ゲルマン諸語は、別の語幹をもっている、ドイツ語 *Sonne*, 英語 *sun*。ゴート語は、*sauil* 中性と *sunno* 女性の両語をもっている。⁴

ゲルマン語は以上のように、まだ西暦開始前後数世紀の間北ヨーロッパの広大な地域にわたっ

て比較的均等に話されていたのである。これをわれわれはラテン語と比較することができる。このラテン語は、大体同時代にローマ帝国全域に拡がり、徐々に方言すなわちイタリア語、スペイン語、フランス語等の言語に分裂していった。ゲルマンの言語上の統一性が、ゲルマン諸部族間の政治的民族学的連繫にどれだけ根拠と対応性を有していたかは、われわれはいかなる文献資料によっても知ることができない。

ゲルマン基語——したがってゲルマン語派全体——の特徴は、特に以下の言語上の諸変化である。すなわち、

1. ゲルマン語音韻推移。
2. アクセントの語頭音節への移行。
3. 形容詞の弱変化形成。
4. 動詞の弱変化形成。

1. いわゆる音韻推移 <ljudskridningen> [Lautverschiebung] によってすべての印欧語破裂音が様々に変化した。

bh, dh, gh > b, ð, ɣ (b-, d-, g-), すなわち、有声帯気音が有声摩擦音になり、語頭音では次第に有声破裂音になった。

p, t, k > f, p, h, すなわち、無声破裂音が無声摩擦音になった。

b, d, g > p, t, k, すなわち、有声破裂音が無声破裂音になった。

例：サンスクリット語 bharati 「彼は運ぶ」、ギリシア語 $\phi\epsilon\rho\omega$, ラテン語 fero —— ゴート語 bairan (bāran と読む), アイスランド語 bera (ギリシア語では有声帯気音が無声音になっている :ph, th, kh. ラテン語では, bh と dh とが語頭音で f となり, gh は h となっている。この系列はサンスクリット語において保持されている。)

サンスクリット語 pād 「足」、ギリシア語 $\pi\acute{o}\varsigma, \pi\omicron\delta\acute{o}\varsigma$, ラテン語 pes, pedis —— ゴート語 fots, アイスランド語 fótr, ドイツ語 Fuss, 英語 foot.

サンスクリット語 daśa 「10」、ギリシア語 $\delta\acute{\epsilon}\kappa\alpha$, ラテン語 decem —— ゴート語 taihun (tāchun と読む), アイスランド語 tíu, ドイツ語 zehn, 英語 ten.

ラテン語 genu 中性「膝」——ゴート語 kniu 中性, アイスランド語 kné 中性, ドイツ語 Knie.

ラテン語 aqua 「水」——ゴート語 ahwa 「水」、ドイツ語 -ach (たとえば Biberach 「海狸川」の), アイスランド語 á 女性「流れる水、川」、古スウェーデン語 ā, スウェーデン語 å [川]。

この変化に影響されなかった語は、比較的少数である (たとえば、ラテン語 mus —— スウェーデン語 mus, ドイツ語 Maus, 英語 mouse ; ラテン語 lumen 「光」——アイスランド語 líómi 「輝き」)。したがって音韻変化は、ゲルマン語のひとつのクリテリオンになっている。いずれのゲルマン語でも音韻変化を経ない子音をもつ語は、借用語にちがいない。

2. 印欧語の語アクセントは、主として音楽的性質のもの、すなわち高音と低音の交替であったと思われる。これは、ゲルマン基語時代に力強い呼気アクセントに変わった。印欧語の語アクセントは、ひきつづいて移動可能のものであった。すなわち、アクセントは語の語根音節、派生語尾あるいは変化接尾辞に置かれることができたし、いくつかの語では種々の変化形でその位置をかえることができた。この原初的状況はサンスクリット語とギリシア語に保持されているが、他方ラテン語はゲルマン諸語のようにすべての語でアクセントを前方へ移動させている。

例：サンスクリット語 *pitá* 「父」(対格 *pitáram*, 与格 *pitré*, 呼格 *pítar*)、ギリシア語 *πατήρ* (対格 *πατέρα*, 属格 *πατρός*, 呼格 *πάτερ*)

サンスクリット語 *pād* 「足」(対格 *pádam*, 属格 *padás*)、ギリシア語 *πούς* (対格 *πόδα*, 属格 *ποδός*)

サンスクリット語 *véda* 「私は見た」、複数 *vidmá* 「我々は見た」(アイスランド語 *veit*, *vitum*)

サンスクリット語 *bu-bódha* 「私は感知した」、複数 *bu-budhimá* 「我々は感知した」(アイスランド語 *bauð* 「私は申出た」、*buðum* 「我々は申出た」)

アクセントの前方移動は、デンマーク人言語学者カール・ヴェァナーが指摘したように、音韻推移の第二段階の後すなわち *p*, *t*, *k* の *f*, *p*, *h* への推移の後に生じたものである。ゲルマン基語無声摩擦音 *f*, *p*, *h* と *s* は、印欧語の原初的語アクセントにしたがって、もし直前の音節主音が語の第一アクセントをもたなければ、それぞれ対応の有声音 *b*, *ð*, *g* と *z* に発展する(ヴェァナーの法則<Vernerska lagen>)。

例：*fader* 「父」、*broder* 「兄弟」の両語は、元来は *t* を含んでいたのである。前者では第一アクセントはこの音に後続する母音に、後者ではこの音に先行する母音にあった。かようにして、サンスクリット語 *pitá* 対格 *pitáram* 「父」、ギリシア語 *πατήρ* —— ゴート語 *fadar*, ドイツ語 *Vater* (ノルド基語 **faðer*, アイスランド語 *faðir*)

サンスクリット語 *bhrātā* (対格 *bhrátaram*) 「兄弟」、ギリシア語 *φράτωρ* —— ゴート語 *bropar*, ドイツ語 *Bruder* (ノルド基語 **brōper*, アイスランド語 *bróðir*) (ノルド語ではこの場合、後に *p* と *ð* が融合したため、ヴェァナーの法則の効力が無効になってしまっている。)

名詞主格語尾 *s* (たとえば、ラテン語 *servus* 「奴隷」、*civis* 「市民」、*fructus* 「みのり」) は、ゲルマン基語 *-z*, ノルド基語 *-R*, アイスランド語 古スウェーデン語 *-r* になる。たとえば、ラテン語 *ventus* 「風」 —— アイスランド語 *vindr*, ラテン語 *hostis* —— ノルド基語 *-gastiR*, アイスランド語 *gestr* 「客」。

強変化動詞の過去形(印欧語の完了形)における変換。アイスランド語 *vas* 'was' —— *várum* 'we were', *fann* 'found' —— *fundum* 'we found' (ノルド基語 **fanþ* —— **funðum*)。

造語における変換。ゴート語 *weihs* 「神聖な」、アイスランド語 *vé* 中性「聖所」(ゲルマン基語 **viha-*) —— アイスランド語 *vígja* 「聖別する、清める」(ゲルマン基語 **vigjan*); ゴート語 *hauhs* 「高い」、アイスランド語 *hárr*, ドイツ語 *hoch* (ゲルマン基語 **hauha-*) —— 古スウェーデン語

högher (ゲルマン基語 *hauga-); 英語 death「死」—— dead「死んだ」, ドイツ語 Tod (属格 Todes) —— tot と töten (ゲルマン基語 *daupu- —— *dauða-, *dauðian).

第一アクセントの語頭への移行は、次第にいくつかの非常に徹底した語形変化の原因になってゆく。すなわち、アクセントの弱い音節の母音は短縮するか、ないしは全く消失してしまうのである(母音低減 <vokalreduktion> および語中音消失 <synkope>). これらの語尾における変化は、すでにゲルマン基語で始まっているが、総体的には個々の古語の歴史に属する。一般的規則は、以下のものである。1. 母音は、子音が後続する場合よりも、純然たる語末音である場合により容易に弱くなる。2. 開母音 a は、閉母音 i, u よりもはやく弱くなる。3. 母音は、短音節よりも長音節の後でよりはやく弱くなる。ゴート語では、a はいつも語末で消失し、i は少なくとも長音節の後で消失し、u は残っている(ゴート語 stains「石」, gasts「客」, sunus「息子」)。西ゲルマン語では、a はいつも語末で、i と u は長音節の後だけで消失している(古高地ドイツ語 stein, gast, hant「手」, これに対して wini「友」, sunu「息子」, fridu「平和」, situ「慣習」; 古英語 stān, giest, hand, これに対して wine, sunu)。ノルド諸語にあっては、低減が共通してもう一段階進行した。短母音は、短音節よりも長音節の後における方がはやかったが、常に語中音消失をみている。語中音消失は、もっともはやく a に、つづいて i に、そして最後に u に起っている。⁵

アクセントの語頭移行は、ゲルマン詩の特徴である頭韻法の前提要件であろう。頭韻法の最古の例は、タキトスが伝えている部族伝説の中にみられる。それによると、ゲルマン人は古歌の中でその始祖をマンヌス Mannus までたどった。そしてこれに3人の息子をあて、この息子たちに因んでゲルマンの主要部族が、インガエウォネース <ingvāner>, イスタエウォネース <istvāoner> およびエ(ヘ) ルミノーネース <(h)erminoner> と呼ばれていた。この3部族名はすべて、母音ではじまっている。⁶

中世ノルド文学(古ノルウェー語、古スウェーデン語および古デンマーク語での法令や俚諺ならびにアイスランド語での物語)には、頭韻で結ばれている成句が多数みられる。たとえば、[スウェーデン語の] till gård och grind「屋敷と畑の柵に」, åker och äng「耕作地と牧草地」, [古スウェーデン語] blop ok bän「血と怪我」, til hogs ok til hänga, til draps ok til döpa, til torfs ok til tiäru, ugildän firi arvä ok äftimäländä「打首および絞首刑に、殺人罪および死罪に、泥炭打およびタール塗の刑に、相続権および殺人事件提訴権剝奪の刑に」 窃盗は処せられる。これらの定句は多く古くて、かような型そのものについてはとにかくそういえる。かような頭韻を踏んだ定句は、いわば頭韻詩の土台なのである。

3. 形容詞は本来、実体詞と同じ風に屈折した。形態論的には、実体詞と形容詞は一単位をなした。この「品詞」の共通名称は、名詞 <nomen> であるといえよう。同じ語幹が、実体詞としても形容詞としても使えた。形容詞は、容易に実体詞化されることができた。アイスランド語

sárr「怪我した」と sár 中性「怪我」, ゴート語 weihs「神聖な」とアイスランド語 vé「聖所」, アイスランド語 hárr「高い」, 古スウェーデン語 högher とアイスランド語 haugr 男性「丘」, アイスランド語 holr「窪んだ」と hol 中性「窪み」, スウェーデン語 ljus「明るい ; 明り」, djup「深い ; 深み」等々。——ゲルマン諸語の形容詞の曲用がいくつかの形で実体詞のそれと異っているならば, それは代名詞の曲用からの影響によるのである。

形容詞は元来, 同一形で限定ならびに不定の意味を有している。ラテン語 bonus vir「ある善い男」と「その善い男」。ゲルマン諸語では, 限定の意味には別の形, いわゆる弱変化形をもつようになっている。これは, n 接尾辞を付加して拡大することによって作られた。

アイスランド語〔男性〕góði (斜格 góða)「その善い男」, 女性 góða (斜格 góðu)「その善い女」, 中性 góða (斜格 góða)「その善きもの」。比較せよ, 名詞語形変化表 hani 男性「牡鶏」, gata 女性「道」, hiarta 中性「心」。

ドイツ語 der gute Mann, des guten Mannes 等々。比較せよ, der Bote, des Boten 等々。かように, 弱変化形容詞の変化は, 実体詞 n 語幹と一致する。

ギリシア語とラテン語では, n 接尾辞によって形容詞語幹から人の呼称を作ることができる。これは, 特に綽名で一般的である。ギリシア語, 形容詞 σκράβος「斜視の」から Σκράβων〔ストラボーン〕, ギリシア語 ἀγαθός「善い」から Ἀγαθών〔アガトーン〕, ラテン語 rufus「赤い」から Rufo。ゲルマン語でも, 同様の実体詞化がみられる。ゴート語 weihs「神聖な」から weiha 男性「僧侶, 牧師」。

n 接尾辞のこの機能は, 弱変化形容詞の出発点であると推測されている。そうすれば, ゲルマン基語ではかような実体詞化は形容詞から極めて一般的になされたであろうし, これらは同格的に実体詞に添加されていたと考えられる。

したがって, 〔アイスランド語〕Sigurðr ungi は本来, 「スィグルズ, その若い男」ということになる。この表現法は, ひとつの確立した変化要素となるほどに能産的になった。通常の(「強変化の」)形容詞形は, いよいよ不定の意味に限定された。〔アイスランド語〕sunr góðr, 'a good son'. 同時に, n 語幹で拡大された形は形容詞化されるようになり, 形容詞の限定的意味をもったのである。sunr góði, 'a son, the good (one)'='the good son'.

最後に, かようにして形成された弱変化形容詞と関連するものとして, 特に限定的意味の担い手となり, また形容詞の独立冠詞発生の因となった指示代名詞がある。例, アイスランド語 inn góði konungr 'the good king', 古スウェーデン語 pän gope konungrin, ドイツ語 der gote König.

4. ゲルマン諸語には, 過去時称<preteritum>を作る二つの相異なる方法がある。すなわち, 母音交替によるもの(スウェーデン語〔不定詞〕giva〔過去形〕gav「与える」, fara for「行く」), および歯子音を含む語尾によるもの(スウェーデン語〔不定詞〕baka〔過去形〕bakade「(パン等を)焼く」, ställa ställde「置く, 据える」)の二つである。ヤーコプ・グリムの時代より, 母

音交替動詞<avljudande verben>(および本来の重複動詞<reduplicerande verben>)は強変化動詞, その他のものは弱変化動詞と呼ばれている。母音交替過去形は, ゲルマン語の新形成である。弱変化動詞の過去と過去分詞における活用語幹は, ゲルマン基語では -ð- を動詞語幹に添えることによって作られた。ゲルマン基語の ð は, 音韻推移法則にしたがえば印欧語の dh から, ないしはヴェァナーの法則によれば t から, 発生したと考えられる。

分詞では, 明らかに印欧語接尾辞 -to- と関係がある。ラテン語 ama-tu-s [愛された], doc-tu-s [教えられた], audi-tu-s [聴かれた]。かようにして, ラテン語の -ā に終る動詞活用第一型 amā- に直接相当するゲルマン基語の活用語幹 *kallō- に接尾辞 -to-> -ðo- を添加された *kallō-ða- 「呼ばれた」。同様に繋ぎ母音 <bindevokal> なしに, ラテン語 video 「私は見る」の過去分詞 visus (印欧語 *vid-to- より), ゲルマン基語 *vīsa-, アイスランド語 vís, ドイツ語 weis.

ゲルマン語過去時称の同様な起源に近い将来求められることは, 疑いなかろう。多くの専門家は, 弱変化動詞過去形を印欧語の t 接尾辞より説明せんとしてきた。しかし, これは成功しておらず, 恐らく全く別のところに説明を求めねばならないだろう。

弱変化動詞の大部分は, 派生的, 第二次的なものである。その一部に, いわゆる使役動詞<kausativer> すなわち強変化動詞からの形成語がある。たとえば, スウェーデン語 [不定詞] bränna [過去] brände [焼く] (brinna brann [燃える] から), lägga lade [横たえる] (ligga låg [横になる] から), föra förde [導く] (fara for [行く] から), leda ledde [案内する] (lida led [(時が) 過ぎる] から) 等々。部分的に, 名詞由来動詞<denominativer>すなわち実体詞と形容詞に基づく形成語がある。たとえば, スウェーデン語 döma [裁く] (dom [裁き] より), välja [選ぶ] (val [選択] より), fylla [満たす] (full [いっぱい] のより), glädja [喜ばす] (glad [うれしい] より) 等々。かような派生動詞は本来, 屈折によっては現在形以上は形成できなかった。過ぎ去った時に対する形が必要ならば, それは助動詞を用いた言換えによって形成されねばならなかった(迂言法)。かような迂言法の時称形成は, 種々の言語において非常に一般的である。その一例は, フランス語の未来形である: j'aime ai 「私は愛することをもつ」(ラテン語 amare habeo より) からの j'aimerai 「私は愛するだろう」。迂言法は, 融合して合成語となり, ついには純粹の単一語<simplex>となったのである。ラテン語 amabo 「私は愛するだろう」(未来)と amabam 「私は愛した」(未完了過去)は, 「なる」という動詞(ラテン語では fui)という動詞の形と合成されている。サンスクリット語 sādāyati 「彼はすわらせる」(使役動詞)の完了は, sādāyam cakāra 「彼はすわらせることをなした」(sādāyam は「すわらせること」の意の動詞的実体詞の対格であり, cakāra は動詞「する」の完了形である)という。

では, ゲルマン語の弱変化動詞の過去形の一部になっているのは, いかなる助動詞であろうか。西ゲルマン諸語は, ノルド語やゴート語においてつとに前文献時代に消滅した動詞「する」を今日も保持している(ドイツ語 tun, 英語 do)。これは, 時称の形を言換えるのに利用されるこ

とができる。たとえば、ドイツ語 *wir taten ihn lieben*, 英語 *he did not come*. この動詞の過去形は、古高地ドイツ語 *teta*, 複数 *tatum*; 古サクソン語 *deda* 複数 *dādun, dēdun*. これらの形は、ゴート語の過去時称活用の中に確認できるとされている。すなわち、

1 人称単数 *salboda* 「私は膏を塗った」, 複数 *salbodedum* 「我々は膏を塗った」。

そうすれば、次のことが推定されよう。ノルド基語 1 人称単数 **kallō-ðeðō* 「私は呼ぶことをした」 > *kallōðō*, これよりアイスランド語 *kallaða*, 1 人称複数 **kallō-ðeðum* 「我々は呼ぶことをした」 (ゴート語 **kallodedum*) > *kallōðum*, これよりアイスランド語 *kølluðum*. ゲルマン基語 **kallō-*, **vali-*, **domi-*, **haþe-* (スウェーデン語 *kalla, välja, döma, hava* に対応する) (の過去形) は、助動詞が前接的にそれに結合した複合形である。複合形成の両要素がひとつの統一体に融合すればするほど、第二の複合形成要素は益々その助動詞の意味を失い、活用要素として認識されているのである。ゲルマン語の歯子音過去形は、詳細な点に関しては多くの困難な問題を呈し、これについて様々の見解が鋭く相対立している。

印欧基語は、われわれが種々の印欧語の古代語間の比較を通して知っているようなものは、著しく屈折した言語であった。文における文法的関係は、種々の語尾の付加によって表現された。この方法で、名詞では数と格の、動詞では数と人称の様々な形が作られた。語尾は、直接語根に、あるいは派生接尾辞で拡大された語幹に付加されることができた。格語尾はあらゆる語幹群でいつも同一であったわけではなく、これらは語幹終母音と語尾との融合によって部分的に変化を受けた。この方法で、すべて語幹形成と性に応じて種々の屈折が生じた。すなわち、語根名詞、o 語幹 (ゲルマン語の a 語幹), ā 語幹 (ゲルマン語の ō 語幹), i 語幹, u 語幹, n 語幹等々である。ゲルマン諸語では、分裂がいくつかの他の印欧語におけるよりもどちらかといえば大きかった。ラテン語では、五つの屈折が考えられている。名詞では、三つの数のカテゴリー—すなわち単数・複数・両数と、八つの格すなわち主格・対格・呼格・属格・与格・奪格・処格・助格が区別された。この変化体系は、サンスクリット語において最もよく保持されている。ギリシア語とラテン語には六格、または呼格を除外すれば (この格はたしかに大多数の場合主格と同一であった) わずか五格しかみられない。ゲルマン諸古語は、通常四格を有する。助格の面影は、古英語と古高地ドイツ語にあるが、この格は普通与格と同一になるか、あるいはこれにとって代られている。与格形における助格の機能は、ノルド諸古語にはっきりと認められる。たとえば、[アイスランド語 *[kasta steini* 「石を (以て) 投げる」, *riða hesti* 「馬に (馬を使って) 乗ってゆく」等々。二つの場所の格形すなわち処格 (存在を示す) と奪格 (起源あるいは発生を示す) は、元来限定的な用法を有していた。ゲルマン諸語においてこれらの格は、与格に混合してゆくか、あるいは前置詞表現法によって代られるかした。格変化が減少してゆくのと同程度に、前置詞の数と用法が増大してゆくようになり、また固定した語順が生じるようになるのである。——両数は、アイスランド語では人称代名詞にだけ保持されている。すなわち, *vit* 「我々二人は」, *it (pit)* 「汝ら

二人は」。

各種の屈折接尾辞がいかにして生じたかは、全くわずかし明らかになっていない。これらは多分当初より、前接的に屈折語幹に付いてこれと融合してしまった小辞であったであろう。これらのいくつかはわれわれの前置詞に大略匹敵する後置詞 <postposition> であったであろうし、他のものは指示または強意の意味を有すること以外には重要でない小辞であったと思われる。いくつかの場合、純粋の語幹が何らの格語尾または数語尾を伴わずに屈折体系を形成している：多数の語の単数主格、たとえばラテン語 *pater* [父は], *nomen* [名は], *terra* [地は], *mare* [海は] (**mari* から), *cornu* [つのは], 中性^o語幹の複数主・対格、たとえばラテン語 *verba* [ことばは・を], ^o語幹の単数呼格、たとえばラテン語 *serve* [奴隷よ]。

格変化と同じく、実体詞における文法性 <genus> もまた、印欧基語からの継承物である。実体詞の男性、女性、および中性への分類は、われわれの知っている印欧語の最も古い形、すなわちヴェーダ讃歌のアーリア語とホメーロスのギリシア語においてすでに完全な発達をみせている。文法性は元来、形態上の呼応現象である。これは就中、形容詞と代名詞とがシンタクスの上で結びつく実体詞の性にしがって種々の形をとることにみられる。同一語幹形成ではあるが性の相異なる語はいくつの場合様々の格形を得るため、性は実体詞そのものの屈折にあらわれる。

印欧語の性は、本来非常に複雑である。これは究極的には、ひとがいくつかのエキゾティックな言語より知っているのに類する対象の価値判断にまで遡ると思われる。最古の印欧語の性の分化は、疑いもなく生物と無生物との区別、すなわち生命のある活動的なものと生命のない被動的なものとの区別である。中性は特に無生物であり、生命のないとされるものであり、種々の類の対象を示す語である。形態論上中性の語は、多くの点で男・女性の語と相違している。中性の語は多くの語幹群にあって純粋な語幹からなっているが、これに対して男・女性は主・対格語尾をとっている。すなわち、

ラテン語 *mons* (<**mont-s*) [山は] 男性, 対格 *mont-em* [山を], *vox* (<**vok-s*) [声は] 女性, 対格 *voc-em* [声を] — *cor* (<**cord*) [心は・を] 中性, *ver* [春は・を] 中性; *homo* [人は, 男性], 対格 *hominem* [人を] — *nomen* [名は・を, 中性]。

fructus [みのりは] 男性, 対格 *fructum* [みのりを] — *cornu* [つのは・を] 中性。

ignis [火は] 男性, 対格 *ignem* [火を] — *mare* (<**mari*) [海は・を] 中性。

無生命の対象は、まれにしか主語として言及されない。したがって、中性は本来特別の主格形を必要としなかった。かようなものが必要であった時には、対格が用いられた、ラテン語 *servus* [奴隷は] 男性, *fagus* [おなの木は] 女性, 対格 *servum* [奴隷を], *fagum* [おなの木を] — *verbum* [ことばは・を]。

代名詞についてもみよ、

ラテン語 *quis* [誰が] — *quid* [何が・を], 古スウェーデン語 *hva(r)* [誰が] — *hvæt* [何が・を]; ラテン語 *is* [彼は] 男性 — *id* [それは・を]; アイスランド語 *sá* [それ・彼は]

男性, *sú* [それ・彼女は] 女性 (同じ語幹より) — *pat* [それは・を] 中性。

生物性 <genus animatum> の男性と女性への分化は、新しいものである。アイスランド語にみられる男性語と女性語間の曲用の相異点は、二次的である。たとえば, *gestr* [客] 男性——*nauðr* [必要] 女性, *fótr* [足] 男性——*kýr* [牝牛] 女性。ラテン語でも同じである。ここでは、第一曲用に女性語と同様に男性語もある。たとえば, *terra* [地] 女性, *nauta* [水夫] 男性。第二曲用においても同じである。たとえば, *servus* [奴隸] 男性, *fagus* [ぶなの木] 女性。ゲルマン諸古語は、ここでより新しい段階を示している。すなわち、すべての *ō* 語幹は女性であり、すべての *a* 語幹は男性 (あるいは中性) である。

一方、印欧語の *ā* 語幹の中には女性的存在のいくつかの名称、就中多分「女」という語 **genā* (ギリシア語 *γυνή* [女, 妻]) があった。これらは、ひとつの意味群に融合した。接尾辞 *-ā* は、他の語の女性傍形を作るのに有用となった。たとえば、ラテン語 *equa* [牝馬] (*equus* [牡馬] より)。同一の働きを有する別の接尾辞は、*i* であった。たとえば、アイスランド語 *merr* [牝馬] (*marr* [牡馬] より), *gyltr* [牝豚] (*gqltr* [牡豚] より), *mær* [乙女] (*mōgr* [若者] より), **yrn*, [スウェーデン] ダーラルナ方言 *ynn* [牝雷鳥] (*orre* [雷鳥] より)。非常に重要なのは、人称代名詞 3 人称に *-ā* あるいは *-i* に終る別の女性形が形成されたことである。たとえば、ラテン語 *is* —— *ea*, ゴート語 *is* —— *si* (ドイツ語 *er* —— *sie*, 英語 *he* —— *she*)。付加語の形容詞でも、女性の意味がはっきりするようになった。たとえば、ラテン語 *bona equa* [良い牝馬]。

発達は、さらに進んだ。女性的存在を示さない *-ā* に終る語は女性語に牽引されて、その限定語 (代名詞, 形容詞) を女性形でとるようになった。これによって、文法的女性が生じたのである。ある特定の接尾辞で形成された小群の性の一定した語は、したがって画一的に作用し、その結果同じ接尾辞の語はすべて同じ性をとるようになったのである。このようにわれわれは、語の形と意味とが語義的連想にも形態的連想にも作用しているのをみるのである。性のカテゴリーの発達の経過においても、同様である。ある語は意味のために、他は語形のために女性群に入った。この点について、われわれの知識は極めて空しい。実体詞の三つの性カテゴリーへの完全な分類は、基語の方言分裂以前に確立していたのである。

特徴的でかつ一部説明の困難なのは、古代の印欧諸語では多数の事物名詞と抽象名詞が男性や女性であって、——予想されうるように——中性ではなかったことである。われわれは明らかに、生命を有する存在に似て、自然のいたる所で活動力を見た存在に関するより原始的で精霊論的把握を仮定しなければならないのである。かようにして、「太陽, 月, 星」を意味する語は男性と女性である。同じく、「空」の名は男性であり、「大地」の名は女性 (*terra Mater* [母なる大地]) である。立木や果樹の名は、生物名詞に属し、原則として女性であり、*-a* に終るもの (ラテン語 *tilia* [菩提樹], *betula* [樺の木] その他) だけでなく、たとえばラテン語 *fagus* [ぶなの木], *quercus* [榎の木], *alnus* [榛の木], *populus* [ポプラの木] もある。ノルド諸語において樹木の名は、女性であったり (アイスランド語 *eik* [榎の木], *bók* [ぶなの木], *biqrk* [樺の

木〕その他), 男性であったりする (アイスランド語 *askr* 〔とねりこの木〕, *almr* 〔にれの木〕, *einir* 〔杜松〕, *reynir* 〔ななかまど〕その他)。これに対して, 果実を意味する語は一般に中性である。たとえば, ラテン語 *pirus* 〔梨の木〕に対して *pirum* 〔梨〕, *olea (oliva)* 〔オリーブの木〕に対して *oleum (olivum)* 〔オリーブ〕その他, スウェーデン語 *äpple* 〔りんご〕, *ällon* 〔どんぐり〕。身体の部分のうち, 活動的・可動的なものは, 男性か女性である。たとえば, 〔スウェーデン語〕 *hand* 〔手〕, *arm* 〔腕〕, *fot* 〔脚〕。しかし, 内部的・静止的なものは, 中性である。たとえば, 〔スウェーデン語〕 *blod* 〔血〕, *ben* 〔骨〕。物質名詞は, 中性である。たとえば, 〔スウェーデン語〕 *vatten* 〔水〕, ギリシア語 *ὕδωρ* 〔水〕。しかし, これに加えて可動的・活動的なものを示す語がある。たとえば, ラテン語 *amnis* 〔流れ, 川〕 男性, ドイツ語 *Fluss* 男性, アイスランド語 *elfr* 女性; ラテン語 *ignis* 〔火〕 男性, アイスランド語 *eldr* 男性。抽象名詞の中で, 「眠り」を意味する語は, 男性である。たとえば, ギリシア語 *ὕπνος*, ラテン語 *somnus*, アイスランド語 *svefn*。これは明らかに, 眠りが人間をコントロールする力だからである。他の抽象名詞は男性か女性であるが, その理由は明らかでない。多数の事物名詞は, 本来抽象名詞であって, 伝統的に基本語 <grundord> の男性ないしは女性の性を保持している。

中性名詞は, *ā* に終る複数形を形成した。たとえば, ラテン語 *bella* 〔戦争〕, *maria* 〔海〕, *cornua* 〔つの〕, *corda* 〔心〕, アイスランド語 *börn* 〔子供〕 (ノルド基語 **barnu*, 古くは **barnō*)。これは本来, 女性 *ā* 語幹と同じ接尾辞による集合名詞形成である。ラテン語 *opera* は, *opus* 〔仕事〕 中性の複数であったり, 女性単数〔骨折り〕であったりすることを参照せよ。アーリア語やギリシア語では, *ā* に終る中性複数単数の述語によって後続されるのがみられる。⁸

かように, 実体詞における性は, すでに印欧諸古語において古くから継承された分類 <klassifikation> である。形容詞と代名詞において性は, 主要語 (実体詞) と付加語 (形容詞, 代名詞) との間の形態上的一致 (呼応 <kongruens>) をめざす呼応屈折によって付随される。この呼応はかようにして, いうまでもなく, 心理的に動因のあるものでもないし, 文法的に必要なものでもない。これは, 全く言語的遺産すなわち印欧諸語の古い歴史における特殊な形態論的発達の結果なのである。

ノルド諸語の名詞合成 <nominalsammansättning> は, 形態の点からみれば, 二つの相異なる型からなる。すなわち, 合成の第一要素が語幹形である場合の本来的 (純粹) 合成名詞 <egentliga (äkta) sammansättningar>, および第一要素が格形——名詞が第一要素の場合, 通常属格——である場合の非本来的 (擬似) 合成名詞 <oegentliga (oäkta) sammansättningar> である。たとえば, アイスランド語 *land-búi* 〔住民〕, しかし *lands-log* 〔国法〕, *landa-merki* 〔(土地の) 境界標〕; *sól-hvarf* 〔至点〕, しかし *sólar-hiti* 〔太陽熱〕。このいずれの型も, 全く印欧語時代からあったのである。語幹合成 <stamkomposition> は, 型としてたしかに最も原初的なものであり, 語形成の手段としてすでに格変化の発生以前に形成されていたにちがいない。たとえば,

ギリシア語 akro-polis〔城砦〕(akros「頂上の」と polis「町」から), ゴート語 weina-gards「ぶどう園」, gasti-gods「親切な」, fotu-bandi「足枷」。格合成語<kasuskompositum>も当初より並置をなし、これが次第に唯一の語アクセントの下にひとつの単一体に融合してしまったのである。しかしながら、両方の合成語形成法は類推によって、その本来の自然な境界をはるかに越えて大いに能産的になった。ところで新語を造る活発な方法として合成法が保持され発達していることは、特にラテン語とその分系的諸言語に対するゲルマン諸語の特徴である。多数のゲルマン語の人名は合成であるし、われわれの地名の多くもそうである。⁹

ゲルマン諸語の定動詞<finita verbet>の特徴的なことは、これが「時の意味」をもっていることである。たとえば、スウェーデン語 jag springer [I run], jag sprang [I ran], jag har sprungit [I have run], han läser [he reads], han läste [he read], han skall läsa [he will read] 等々。われわれは、動作ないしは出来事の時をあらわすこれらの形を動詞の時称形とも呼ぶ。これらのうち二つだけが、活用によって形成される。すなわち、現在と過去(半過去)である。他のものは、助動詞を使った迂言法による。ラテン語の状況はこれと似ており、ここでは活用によって、六時称形すなわち現在・半過去・未来・現在完了・過去完了・未来完了が形成される。一方、ラテン語やゲルマン諸語における定動詞の基本的な時の意味は、大部分二次的な発達の結果である。印欧語の動詞は本来、ギリシア語の現在、不限定(アオリスト)および完了に相当する形をもっていたにちがいない。現在形は一般に継続相の意味をもち、行為を(普通、現在における)継続中のものとして示す。たとえば, $\lambda\epsilon\pi\omega$ 「私は残す」。アオリストは本来、動作が瞬間的であることをあらわした。接尾辞 $\mu\epsilon\iota$ (これは元来、時を示す小辞「その時」)の付加によって、これは過去におかれるようになった。たとえば, $\epsilon\lambda\pi\omega\nu$ 「私は残した」。最後に完了は、動作を(現在あるいは過去において)終了したまたは完了したものとして示した。たとえば, $\lambda\epsilon\lambda\omicron\iota\pi\alpha$ 「私は残している」, $\delta\iota\delta\alpha$ 「私は見てしまった」(すなわち、「私は知っている」)。かように、この三形は第一に動作の様相<aktionsart>を表現した。これに加えて、ある程度動作の時をもあらわした。さらにこれは、加音<augment> *e- によるほかに、時の副詞によっても説明できよう。

ゲルマン諸語では(ラテン語におけると同じく)、動詞形における時の意味が益々支配的になっている。継続相の形は、現在の意味を得、一時的現在<temporalit presens>になった。現在完了の形は、現在に対する関連を次第に失くしてゆき、過去の意味を得、一時的過去<temporalit preteritum>になった。こうして印欧語の完了は、ゲルマン語強変化動詞の過去の土台になっているのである。アオリストは、通常の活用形としては消滅したが、その働きは、現在および特に過去にとって代わられた。

大多数の単純動詞は、継続相の意味をもつ。これに対して、小辞による複合動詞の多くは、完了的ないしは瞬間の意味をもつ。接頭辞 *ge- は、完了構成の手段としての特別な役割を演じて

いる（ドイツ語 *gefahren, geschnitten*）。またこれと関連して、アイスランド語のエッダ詩における小辞 *of (um)* の用法についても思い出すべきであろう。

不定詞は、印欧語の動詞体系にはまだなかった。しかし、一群の動詞的実体詞（動作名詞＜*nomina actionis*＞）が、様々の接尾辞を伴って形成された。形態論的には、ゲルマン語の不定詞（たとえば、ゴート語 *giban*, ドイツ語 *geben*, アイスランド語 *gefa*）は、かような動詞的実体詞の固定化した格形なのである（接尾辞 **-ono-* を伴う。たとえば、サンスクリット語 *bharana* 「運ぶこと」）。不定詞への発展は、この形がいくつかのシンタクス上の用法において、たとえば叙法の助動詞の後で普通になることによって、起ったのである。たとえば、〔スウェーデン語〕*jag skall komma* [I shall come], *jag vill stanna* [I will stay] 等々。さらに、この形が動詞の時の意味の要素を得るようになったこと、およびこの形が名詞的付加詞（限定詞＜*attribut*＞）の代りに動詞的付加詞（目的語、副詞）をとることによって、この発展が起ったのである。不定詞は、こうして動詞体系の一部となった。

本来の動詞的実体詞としての不定詞は、前置詞によって先行されることもできた。しばしば不定詞は、ある動作の意図や目的を表現するために用いられた。目的の意味をもつ前置詞から、いわゆる不定詞記号＜*infinitivmärket*＞が生じた。すなわち、ドイツ語 *zu*, 英語 *to*, アイスランド語 *at*, （語源的には、前置詞 *ad* 「～に向って、対して」、ラテン語 *ad* と同一）。¹⁰ 不定詞記号の使用は徐々に、これが本来属さない用法、たとえば不定詞が文中に主語あるいは目的語としておかれている時の用法へと転用されることができるようになった。不定詞記号がすべてのゲルマン語において同一でないこと、および不定詞がまた実際に種々な具合に用いられることは、動詞的実体詞の不変動詞形への発達が比較的のちの時代に起ったことを示している。¹¹

ラテン語は周知の如く、近代諸言語に比較してより自由な語順を有している。これはまちがいはなく、印欧語からの継承物であり、十分に発達した屈折と関連がある。文中の文法的関係は、既述のように、語の屈折によって示され、語の配置によってではなかった。かなり自由な語順は、殊にラテン語詩にとって特徴的である。自由な語順は、ゲルマン諸古語、特にアイスランド語でもみられる。アイスランド語詩、特にスカールド詩の著しくゆるい語の配置は、疑いもなく、より古い言語段階の伝統の上にたっているものである。¹²

著者による註

- 1 古低地フランコンニア語は、近代オランダ語の基礎をなす。古サクソン語は、12世紀以降ドイツの膨脹に伴って北ドイツに拡がった中低地ドイツ語と近代低地ドイツ諸方言の基礎をなす。後にみるように、中世に中低地ドイツ語は、ノルド諸語に甚大な影響を与えている。

- 2 英国の年代記作者 Ethelweard (975年頃)によると、この町はサクソン人には Sleswig, デーン人には Hedeby と呼ばれていた。したがってこれは、既述の国境の大森林 Iarnwith-Isarnho と同じような二重名称である。
- 3 B. Hesselman in 《Ordgeografi och språkhistoria》(1936), s. 127 f.
- 4 ゲルマン語派について、詳しくは以下を参照せよ。T. E. Karsten, *Die Germanen* (1928); A. Meillet, *Caractères généraux des langues germaniques* (1917); G. Neckel, *Gothiscandza* (in *Zeitschrift für Deutschkunde*, 1931, s. 154 f.); H. Arntz, *Urgermanisch, Gotisch und Nordisch* (in *Germanische Philologie, Festschrift für Otto Behagel*, 1934, s. 29 f.); T. Frings, *Germania Romana* (1932); E. Rooth, *Die Sprachform der Merseburger Quellen* (in *Niederdeutsche Studien* C. Borchling dargebracht, 1932); H. Kuhn, *Zur Gliederung der german. Sprachen* (in *Zeitschrift für deutsches Altertum*, Bd 86, 1955); L. L. Hammerich, *Indeling en ontwikkeling van het Germaans* (1946); Fr. Maurer, *Nordgermanen und Alemannen* (1942); W. Mitzka, *Deutsche Mundarten* (1943); L. Weisgerber, *Die geschichtliche Kraft der deutschen Sprache* (1959), s. 91 f.; A. Bach, *Geschichte der deutschen Sprache* (8. Ausg. 1965), § 44.
- 5 ノルド語の語中音消失について、詳しくは原書31ページ、および E. Wessén, *Svensk språkhistoria* 1, § 1.
- 6 B. Hesselman (*Huvudlinjer i nordisk språkhistoria*, s. 25)によれば、ゲルマン基語のアクセント変化の原因は、「ゲルマン諸部族がこの時代に異民族すなわち古代イタリア人、ケルト人、恐らくまたエトリリア人やイリュリア人とかなり密接に接触するようになった」ことである。
- 7 たとえば、ラテン語における単数属格 *reg-is* [王の], *servi* [奴隷の] (< *servo-i*), *mensæ* [テーブルの] (< **mensa-i*), 複数与格 *reg-ibus* [王達に], *servis* [奴隷共に], *mensis* [テーブルに]。特に、いくつかの語幹群における -s に終る単数主格に注意せよ (*reg-s* [王は], *servo-s* [奴隷は], *civi-s* [市民は], *fructu-s* [みのりは], *die-s* [日は])。しかし、これはあらゆる語にあってというわけではない (*mensa* [テーブルは], *pater* [父は], *homo* [人間は]), 中性名詞では全くない (*ver* [春は], *bello-m* [戦争は], *mare* [海は], *cornu* [つのは])。
- 8 印欧諸語の性については、K. Brugmann, *The nature and origin of the noun genders in the Indogermanic languages* (1897) をみよ。ブルークマンによれば、性は形態の類推によって本来二次的に発達したものである。セム諸語は二つの性群 [男性と女性] をもち、一方フィン語は実体詞における性カテゴリーを全く欠いている。
- 9 合成語についてさらに詳しくは、E. Wessén, *Svensk språkhistoria* 2 (4 uppl.), s. 74 f.
- 10 スウェーデン語の口語では、前置詞 *till* (te と発音される) あるいは *till att* (te å と発音される) も不定詞記号として用いられる。これはまた、口語を再現している作家、たとえば Agneta Horn, Gustav II Adolf, Karl XII, O. v. Dalin (Argus [雑誌名]) の古い文語にもみられる。〔現代標準スウェーデン語の不定詞記号は、*att* である。〕
- 11 不定詞について詳しくは、E. Wessén, *Svensk språkhistoria* 3 (2 uppl. 1965), s. 144 f.
- 12 文中の語順については、E. Wessén, *Svensk språkhistoria* 3 (2 uppl. 1965), s. 201 f.